

ポスト国民国家へと移行する社会を読み解く次世代 カリキュラムの開発研究 (Ⅲ)

—市民的資質の評価方法の検討—

宮本 英征 池野 範男 伊藤 直哉
草原 和博 藤原 隆範 湯浅 清治

1. はじめに

本継続研究は主体的な市民的資質を育成する新しい地理歴史科カリキュラムの開発を目指している

¹⁾。本年度の研究は、地理歴史科カリキュラムによって育成する市民的資質の評価方法について検討する。

これまでの社会科教育・歴史教育では事実や知識をどのくらい獲得できたのかという量的な評価を改善するために、教師が到達規準を定め評価する到達度評価の研究が行われてきた²⁾。しかし、到達度評価では、生徒一人一人が多様に成長する主体的な市民的資質を十分に捉えることはできない。そこで、「真正の評価」論に基づくパフォーマンス評価に着目し、新しい地理歴史科カリキュラムで育成する市民的資質を評価する方法を検討する。

「真正の評価」論やパフォーマンス評価は、質的研究方法に位置づく、新しい教育評価とされる。

「真正の評価」論は、「テストのために特別に設定された状況ではなく、現実の状況を模写したりシミュレーションしたりしながら評価することの重要性を強調する立場である。それにより、子どもに学習の意義を感じさせるだけでなく、現実の状況で求められるような思考力・判断力・表現力や創造性を身につけさせることができる。」³⁾と定義される。この論理に基づき具体化した代表的な評価方法がパフォーマンス評価であり、「知識やスキルを使いこなす(活用・応用・総合する)ことを求める問題や課題などへの取り組みを通して評価する評価方法の総称である。」と説明される⁴⁾。このような一般教育的な論理を踏まえ、社会科教育・歴史教育では、

市民的資質を捉えるために有効な教育論へと発展させる研究や、学校現場における実践的研究が行われている⁵⁾。

本研究では、社会科教育・歴史教育で行われている研究を参考にして、これまで開発されていない高等学校地理歴史科におけるパフォーマンス評価を開発する。そのために、事例として、単元「言説『貨幣』について考える」を取り上げ、主体的な市民的資質を評価する方法を、パフォーマンス課題、ルーブリック、評価問題、評価計画を視点に検討する。

2. 単元「言説『貨幣』について考える」のパフォーマンス評価の開発

西岡加名恵⁶⁾は、質的研究方法の一つであったパフォーマンス評価を単元開発と結びつけ「逆向き設計」論として提示した。パフォーマンス評価を取り入れた単元開発・実践は具体化の段階に入ったといえる。「逆向き設計」論に基づく場合、パフォーマンス課題、ルーブリック、評価問題、評価計画(授業計画)を開発し提示する研究が多い。そのため、本研究でもこの四つの視点から、パフォーマンス評価を開発し、市民的資質の育成を評価する方法を明らかにしたい。

(1) パフォーマンス課題の設定

パフォーマンス課題は「リアルな文脈の中で知識やスキルを応用・総合しつつ使いこなすことを求めるような課題」⁷⁾と定義される。この定義を参考にして、本研究においては、国家・社会における行為や態度、姿勢など市民的資質を形成するための課題

であるとする。市民的資質は、例えば、普段になげなく使用する貨幣を言説として捉え直し⁸⁾、目的や価値観を結びつけて語ることができることを、自らが説明できる資質であり、次のような思考活動を行うことになる。

- ①私たちが貨幣を使用する場合、貨幣には国力を増加・維持したいという国家・政府の目的や価値観が結びついている。近代国家は国民国家を形成・維持する資本を国民の経済活動による富の産出に負っていたので、国民に貨幣を「持つ者」「使用する者」となるような行動を促した。このため、人々はより多くの貨幣を獲得し使用するために人々との関係から疎外された労働に従事する問題に直面したことを理解できる。
- ②私達は「貨幣」の使用に目的（a）個人の決定（調整）による労働生産量を価値化する、や目的（b）個人が使用したい富を象徴する、を結びつけ、価値観：自分や他人が必要なことのために働くべきだ、という他者・自分を中心とした価値観を形成できることを検討し、これまでの国家を視点にした貨幣の使用の在り方を相対化することができる。
- ③価値観「自分や他人が必要なことのために働くべきだ」が結びつく地域通貨の使用によって、コミュニケーションが形成され、貨幣が言説と同じ働きを担うことができることを検討する。そして、人々との関係から疎外された労働を克服するためには、自分自身が決定した労働生産量と、自分にとって必要な使用価値を示す地域通貨のような貨幣を導入することで、他人のため、自分のための労働に従事し、自分自身の価値を貨幣以外に置くことができるか考えることができる。

以上のような思考は、社会を言説として認識することで、隠れている目的や価値観を自覚し、主体的に判断できる市民的資質に結びつく。このため、「言説『貨幣』について考える」という課題をパフォーマンス課題として設定する。また、パフォーマンス課題は単元テーマとして生徒に実際に提示する。そうすることで、生徒も課題を明確に認識できる。ただし、言説という用語は、生徒には難しいため、生徒に実際に提示する課題は「貨幣について考える」にする。

（2）パフォーマンス課題「貨幣について考える」のルーブリック

本単元のパフォーマンス課題「貨幣について考え

る」のルーブリックとその構成原理を示したものが表1である。表1は「評価規準」「学習内容」「ルーブリックの構成原理」に区別している。「評価規準」は学習内容と結びつき、評価規準と学習内容が同じ構成原理で組織されることを示している。ルーブリックの評価規準は6段階で構成する。0段階は「お金は物と物との交換、対象となるものの価値、価値を保存するなどの働きを担ってきたことを理解している」など貨幣の一般的な機能の確認段階である。第1～3段階は貨幣の使用についての特色、及び使用に結びつく目的や価値観を分析できるかを評価する規準である。第4段階は貨幣の使用に結びつく歴史的な目的や価値観を自覚できたかを確認する規準である。第5段階は貨幣の使用に結びつく新しい価値観を検討し、貨幣の使い方について語ることができるかどうかを確認する規準である。

「学習内容」は各段階の評価規準に基づいて組織される。例えば、第5段階の学習内容は同じ段階の四つ評価規準に基づいて、「地域通貨を導入することで、自分がしたいあるいはしてほしいことを富（使用価値に基づく富）に象徴させることができる。また、導入することによって、人々の間でコミュニケーションが始まる可能性が高い。この結果、私達の労働は地域で調整された労働を価値化し、また、国家ではない個人の使用価値を富として象徴する地域通貨を使用することで、自分のためあるいは人のための労働を取り入れることができるかもしれない。」のように組織される。その結果、授業実践前において学習内容は評価規準のアンカー（生徒の作品事例）として機能している。

「ルーブリックの構成原理」は、評価規準と学習内容の構成原理が言説の脱構築論と歴史の脱構築論に基づくことを説明する。言説の脱構築論は貨幣（制度）や法（制度）、家族（制度）など社会制度や国家そのものを誰かが述べた言説として捉え直し、他者の目的や価値観を結びつける。また、言説は発話し語るものであるため、自分が結びつける目的や価値観を判断することも重視する。過去に使用されたポンド金貨や現在も使用されるドル紙幣は言説として捉え直すことで、他者の目的、価値観が結びつくものであり、このことを自覚するだけでなく、新しい目的や価値観を結びつけて考えることが可能となる。歴史の脱構築論は、ポンド金貨やドル紙幣に関する歴史的な記述は、客観的な記述ではなく歴史家など誰かが主観的に記述したものと捉え直す論理である。私達は歴史的記述に結びつく他者の目的や価値観を反省し、自らが歴史を記述することができ

表1 「言説『貨幣』を考える」のルーブリックの構成原理

段階	評価規準	学習内容	ルーブリックの構成原理																
			言説の脱構築論	歴史の脱構築論															
5	<p>◎私たちが使用するお金には多様な目的や価値観が結びつくことを尊重できる。</p> <p>◎自分がお金に結びつけていた目的や価値観は一つの価値観にすぎないことを理解する。</p> <p>◎お金にどのような価値観を結びつけるか判断し、自分のお金の使い方について意見できている。</p> <p>◎お金は他者との関係(コミュニケーションや関わり)を創ることができることを理解できている。</p>	<p>◎(例) 地域通貨を導入することで、自分がしたいあるいはしてほしいことを富(使用価値に基づく富)に象徴させることができる。また、導入することによって、人々の間でコミュニケーションが始まる可能性が高い。この結果、私達の労働は地域で調整された労働を価値化し、また、国家ではない個人の使用価値を富として象徴する地域通貨を使用することで、自分のためあるいは人のための労働を取り入れることができるかもしれない。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="width: 15%;">貨幣の新しい 使用法</td> <td colspan="3" style="text-align: center;">目的 労働の価値化</td> </tr> <tr> <td style="width: 15%;"></td> <td style="width: 35%;">①自由競争に 基づく</td> <td style="width: 35%;">③管理・調 整に基づく</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">目的 富の 象徴</td> <td style="text-align: center;">②④国 家が使 用する</td> <td>価値観(1) 国力を増大さ せたい</td> <td>価値観 (2) 国力 を維持した い</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">⑥自分 が使用 する</td> <td></td> <td>価値観 (3) 自分 や他人が 必要なこと のために働 きたい。</td> </tr> </table>	貨幣の新しい 使用法	目的 労働の価値化				①自由競争に 基づく	③管理・調 整に基づく	目的 富の 象徴	②④国 家が使 用する	価値観(1) 国力を増大さ せたい	価値観 (2) 国力 を維持した い		⑥自分 が使用 する		価値観 (3) 自分 や他人が 必要なこと のために働 きたい。	<p>◎私が「貨幣」を言説として捉え直し、結びつく価値観の多様性を尊重する。</p> <p>◎私が「貨幣」に結びつけていた他者の価値観を相対化する。</p> <p>◎私が価値観を判断したり再構築して、「貨幣」について主体的に述べる。</p>	<p>◎私が貨幣の使用に関する記述に結びつく価値観の多様性を尊重する。</p> <p>◎私が貨幣の使用に関する記述に結びつけていた他者の価値観を相対化する。</p> <p>◎私が自分の貨幣の使用に関する記述に結びつく価値観を主体的に構築する。</p>
貨幣の新しい 使用法	目的 労働の価値化																		
		①自由競争に 基づく	③管理・調 整に基づく																
目的 富の 象徴	②④国 家が使 用する	価値観(1) 国力を増大さ せたい	価値観 (2) 国力 を維持した い																
	⑥自分 が使用 する		価値観 (3) 自分 や他人が 必要なこと のために働 きたい。																
4	<p>◎私たちが使用するお金には国家の目的や価値観が結びついていることを自覚できた。</p>	<p>◎貨幣の使用には、政府・国家による価値観(1) 国力を増大させたいや価値観(2) 国力を維持したい、が結びついている。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="width: 15%;">貨幣の使用法</td> <td colspan="3" style="text-align: center;">目的 労働の価値化</td> </tr> <tr> <td style="width: 15%;"></td> <td style="width: 35%;">①自由競争に 基づく</td> <td style="width: 35%;">③管理・調 整に基づく</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">目的 富の 象徴</td> <td style="text-align: center;">②④国 家が使 用する</td> <td>価値観(1) 国力を増大さ せたい</td> <td>価値観 (2) 国力を維持 したい</td> </tr> </table>	貨幣の使用法	目的 労働の価値化				①自由競争に 基づく	③管理・調 整に基づく	目的 富の 象徴	②④国 家が使 用する	価値観(1) 国力を増大さ せたい	価値観 (2) 国力を維持 したい	<p>◎私が「貨幣」を言説として捉え直し、結びつく歴史的指導者などの他者の価値観に影響を受けることを自覚する。</p>	<p>◎私が貨幣に関する歴史的記述に結びつく教科書執筆者などの他者の価値観に影響を受けることを自覚する。</p>				
貨幣の使用法	目的 労働の価値化																		
		①自由競争に 基づく	③管理・調 整に基づく																
目的 富の 象徴	②④国 家が使 用する	価値観(1) 国力を増大さ せたい	価値観 (2) 国力を維持 したい																
3	<p>・お金は誰かの価値観が結びついて使用されていることを理解できている。</p>	<p>・国力を増大させたいイギリス政府(国家)の意図</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 45%;">ポンド金貨の使用</td> <td style="width: 55%;">(各班の労働の結果、貧富の差、全体の貨幣量の増加)</td> </tr> </table> <p>目的①ポンド金貨が人々の自由競争に基づく労働生産量を示す。 目的②ポンド金貨がイギリス政府が使用できる国富を示す。</p> <p>価値観(1) 国力を増大させたいイギリス政府(国家)の意図。</p> <p>・世界恐慌に直面したアメリカ政府は生産(労働)を調整しながらも、国力の維持を目指す価値観(2)があった。(図略)</p>	ポンド金貨の使用	(各班の労働の結果、貧富の差、全体の貨幣量の増加)	<p>・「ポンド金貨」を言説として捉え直すと、イギリス政府ら他者の価値観が結びつく。</p>	<p>・ポンド金貨についての歴史的記述には教科書執筆者などの他者の価値観が結びつく。</p>													
ポンド金貨の使用	(各班の労働の結果、貧富の差、全体の貨幣量の増加)																		
2	<p>・お金は誰かの目的が結びついて使用されていることを理解できている。</p>	<p>・ポンド金貨の使用には、人々の自由競争に基づく労働生産を結びつける目的①と国力(国富)を表し、政府や国家が使用可能にする目的②が結びつく。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 45%;">ポンド金貨の使用</td> <td style="width: 55%;">(各班の労働の結果、貧富の差、全</td> </tr> </table>	ポンド金貨の使用	(各班の労働の結果、貧富の差、全	<p>・「ポンド金貨」を言説として捉え直すと、イギリス政府ら他者の目的や判断が結びつく。</p>	<p>・ポンド金貨についての歴史的記述には教科書執筆者などの他者の目的や判断が結びつく。</p>													
ポンド金貨の使用	(各班の労働の結果、貧富の差、全																		

		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 5px;">体の貨幣量の増加)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">目的①ポンド金貨が人々の自由競争に基づく労働生産量を示す。 目的②ポンド金貨がイギリス政府が使用できる国富を示す。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ドル紙幣の使用には、目的③ドル紙幣が管理調整に基づく労働生産量を示す、及び、目的④ドル紙幣がアメリカ政府が使用できる国富を示すが結びつく。(図略) 		
1	<ul style="list-style-type: none"> ・お金が労働生産量を示すこと、獲得したお金が富となることを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各班の獲得したお金が労働生産量を示すこと、クラス全体で獲得した貨幣が国富となること、毎年、国富が増加していく中で労働生産量に従って獲得した貨幣量に差が起り、貧富の差が発生したことなどに気がつく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px; display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">ポンド金貨の使用</div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 5px;">→</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">(各班の労働の結果、貧富の差、全体の貨幣量の増加)</div> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ドル紙幣の数値が管理的調整的に生産したアメリカの人々の労働生産量を示している。貧富の差が縮小している。全体の貨幣量は増加している。(図略) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポンド金貨の使用は、「ポンド金貨」という言説になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポンド金貨についての記述は教科書執筆者などの他者の記述である。
0	<ul style="list-style-type: none"> ・お金は物と物との交換、対象となるものの価値、価値を保存するなどの働きを担ってきたことを理解している。 ・評価規準にどれも当てはまらない。 ・分からない。記述なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポンド金貨やドル紙幣は物と物との交換、対象となるものの価値、価値を保存するなどの働きを担ってきた。 		

る。つまり、言説の脱構築論と歴史の脱構築論は、評価規準と学習内容が貨幣を歴史的な事実や知識ではなく言説として構築し、さらに、生徒が価値判断を行いパーソナルに語れるように、段階的向上的に評価できるようにしている。

本単元のルーブリックの特色は次のようにまとめることができる。第1は、評価規準は学習内容に結びついて組織される。第2は、学習内容は評価規準のアンカーの事例となる。第3は、評価規準と学習内容は脱構築論を構成原理にしている。

(3) 評価問題の開発

ルーブリックを適用し市民的資質を把握するために、評価問題を作成し、生徒の回答を「作品」として収集する。パフォーマンス評価では歴史新聞や手紙を作成したりするが、最終的にルーブリックを当てはめるのは生徒の記述である。また、本単元は貨幣を制度としての事実や知識ではなく言説として構

築し、さらに、生徒に語らせている。そのため、授業の前後に生徒が考える貨幣について記述させ、その記述の変化をルーブリックに基づいて評価付けることにし、表2のような事前-事後アンケートを開発した。

また、事前-事後アンケートを実施する際には、表3のようにルーブリックを生徒に示し、自身の回答を自己評価できるようにした。そうすることで、教師と生徒が協力して、学びを向上させる道筋を示し、主体的に市民的資質を育成できるようにした。

表4の意見アンケートは、ルーブリックの第4段階の学習内容を授業で扱った後、授業者のまとめとして相対化する意図がある。学習内容を授業者のまとめとして相対化させるのは、ルーブリックの第5段階において、貨幣に結びつく多様な価値観を尊重したり、自分が結びつけていた価値観を相対化したりして、新しい価値観を結びつけるか判断し、パーソナルに貨幣について語れるようになるためである。

表2 事前－事後アンケート

問1 今日、学校で「お金」に関する会話をしたり、自分で考えたりしたか？支障がない範囲でどのような会話の中で「お金」について言及したか教えてください。

問2 「お金」とはあなたにとってどのような存在か教えてください。また、なぜ、そう思ったか教えてください。（回答欄は【存在】と【理由】に区別）

問3 「地域通貨」という「お金」を聞いたことがあるか。知っている人はどのような「お金」か説明してください。

問4 「お金」にはどのような働き・機能があると思うか。考えてみよう。

問5 あなたはどのような仕事を選ぶだろうか。ソフトバンクのような民間企業だろうか、それとも、市役所などの公務員であろうか。支障がない範囲で、仕事やその仕事に興味がある理由を教えてください。（回答欄は【仕事】と【理由】に区別）

表3 事前・事後アンケート用の自己評価シート

評価規準

規準の内容	評価
◎私たちが使用のお金には多様な目的や価値観が結びつくことを尊重できる。	5
◎自分がお金に結びつけていた目的や価値観は一つの価値観にすぎないことを理解する。	
◎お金にどのような価値観を結びつけるか判断し、自分のお金の使い方について意見できている。	
◎お金は他者との関係（コミュニケーションや関わり）を創ることができることを理解できている。	
○私たちが使用のお金には国家の目的や価値観が結びついていることを自覚できる。	4
・お金は誰かの価値観が結びついて使用されていることを理解できている。	3
・お金は誰かの目的が結びついて使用されていることを理解できている。	2
・お金が労働生産量を示すこと、獲得したお金が富となることを理解している。	1
・お金は物と物との交換、対象となるものの価値、価値を保存するなどの働きを担ってきた。	0
・評価規準にどれも当てはまらない。	
・分からない。記述なし。	

*上の評価規準に基づいて、アンケートの回答を自分で評価してみよう。

問2・・・（評価 ）理由（ ）

問3・・・（評価 ）理由（ ）

問4・・・（評価 ）理由（ ）

問5・・・（評価 ）理由（ ）

評価の合計・・・（ ）

*自分で評価してみた感想（ ）

表4 意見アンケート（第4段階）と自己評価シート

問 授業のまとめ「貨幣の使用には、政府・国家による価値観（1）国力を増大させたいや価値観（2）国力を維持したい、が結びついている」というまとめをどのように考えたか。普段使用しているお金に学習したような目的や価値観が結びついていると思うか？

*下の評価規準に基づいて、アンケートの回答を自分で評価してみよう。

規準の内容	評価
◎私たちが使用のお金には多様な目的や価値観が結びつくことを尊重できる。	5
◎自分がお金に結びつけていた目的や価値観は一つの価値観にすぎないことを理解する。	
◎お金にどのような価値観を結びつけるか判断し、自分のお金の使い方について意見できている。	
◎お金は他者との関係（コミュニケーションや関わり）を創ることができることを理解できている。	
○私たちが使用のお金には国家の目的や価値観が結びついていることを自覚できる。	4
・お金は誰かの価値観が結びついて使用されていることを理解できている。	3
・お金は誰かの目的が結びついて使用されていることを理解できている。	2
・お金が労働生産量を示すこと、獲得したお金が富となることを理解している。	1
・お金は物と物との交換、対象となるものの価値、価値を保存するなどの働きを担ってきた。	0
・評価規準にどれも当てはまらない。	
・分からない。記述なし。	

（評価 ）理由（ ）

*自分で評価してみた感想（ ）

意見アンケートの回答もルーブリックを示し自己評価させるものとした。

まとめると、本単元が開発した評価問題の特色は次のようになる。第1は、事前・意見・事後アンケートによって、授業後だけでなく、授業前、授業中

の生徒の回答も収集する。そうすることで、市民的資質の成長をより丁寧に把握することができる。第2は、自己評価シートによりルーブリックを公開し、学ぶ道筋を示したことである。評価が生徒の主體的な学びを喚起するものに変化させた。第3に、教師

と生徒が達成水準を確認でき、何を学んだかが分かるようにしたことである。

（４）単元「言説『貨幣』を考える」の単元計画

単元計画はパフォーマンス課題である「言説『貨幣』を考える」に対して、生徒が貨幣を制度としての事実や知識ではなく言説として構築し、さらにパーソナルに語る事が出来るように計画する。そして、ルーブリックで示した学習内容を段階的向上的に学ぶように組織する。そのため、小単元1「貨幣とは何か」、小単元2「イギリスの金本位通貨制度の形成」、小単元3「アメリカの管理通貨制度の試み」、小単元4「貨幣を考える」で構成する。例えば、小単元2の場合、教師はシミュレーション2を生徒に体験させ、ポンド金貨の使用によって、各班の獲得したお金が労働生産量を示すことやクラス全体で獲得した貨幣が国富となること、また、国富が増加していく中で労働生産量に従って獲得した貨幣量に差が起り、貧富の差が発生したことなどに気がつかせる。そして、このような社会や労働に変化をもたらしたポンド金貨の使用には、他者の目的や価値観が結びついていることを、ツールミン図式を利用しながら、生徒に考えさせる。最終的には、金本位制度の下のポンド

金貨の使用は目的①自由な競争に基づく労働生産量を貨幣で示し、また、目的②貨幣が国家の使用できる国富を表すようにしたこと、その目的には価値観

（１）国力を増大させたい政府（国家）の意図が結びついたこと、そのため、より多くの金貨を得るために、劣悪な環境の中でも労働に従事し、金貨の多寡によって貧富の差が発生する問題に直面したことを学べるように教師が導く計画になっている。また、市民的資質の達成度を教師と生徒が把握できるように、授業の最初に、事前アンケートと自己評価シートの実施、小単元3終了時に意見アンケートと自己評価シートの実施、授業後に事後アンケートと自己評価シートの実施を計画している。このような授業前、授業過程、授業後の一連の評価活動を計画するのは、市民的資質の育成を把握するだけではなく、生徒の達成度から授業改善を行うことを前提にしているためである。

以上のような単元計画は、第1に、教師と生徒が協力して学びを構築する道筋となっている。第2に、学びの道筋の達成度を把握するために評価活動が最初から計画されている。第3に、生徒の学びの達成度から何を学んだか、何を学べたかが分かるようにして、単元構成をより良いものへ改善できるものとして考えている。

表5 単元「言説『貨幣』を考える」の単元計画

展開	主要発問		資料	主要な学習内容	
	上位発問	下位発問		下位知識	上位知識
事前アンケート・自己評価シート					
小単元1 一時限	◎私達にとって、貨幣とはどのような存在だろうか。貨幣について考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> 私達はどのように働いていると思うか。 お金にはもともとどのような働きがあると思うか。 なぜ、私達はお金を求めるのだろうか。 	1 生涯賃金 シミュレーション1	<ul style="list-style-type: none"> ◎より多くのお金を得るように働いていないか。 ・交換機能が中心であり、価値尺度や価値保存の機能がある。 	
				シミュレーション1 ①生徒に手に入れたい物品を指示する。 ②1分間で物々交換をさせ、指示を達成できた生徒の人数を確認する。 ③お金を導入して1分間交換させ、指示を達成できた人数を確認する。 ④物々交換との違いの感想を尋ねる。 ・多くのものに交換するため。貯蓄するため。	
小単元2 二時限	○私達が働いて獲得する貨幣にはどのような働きが結びついているのか。	<ul style="list-style-type: none"> 19世紀イギリスの自由貿易政策の下で、イギリスはどのような貨幣を発行したのか。 ・ポンド金貨の使用で、イギリスの人々はどのような労働に従事することになったのか、体験してみよう。 	シミュレーション2	<ul style="list-style-type: none"> ・大量の金貨を保有したイギリスはポンド金貨を発行した。 	○貨幣の使用には、政府・国家による価値観 (1) 国力を増大させたいや価値観 (2) 国力を維持したい、が結びついている。
				シミュレーション2 ①クラスを4人10班に分け、綿織物工場4つ、農家4つ、貿易商（原綿・肥料）2つに分ける。 ②教師はイングランド銀行となり、国富であった金500に基づく金貨500を流通させる金本位制度を形成すると宣言。金貨1枚を綿織物1枚と、また、食糧2キロで交換することにする。原綿・肥料1つを金貨1枚で交換する。始めに各班に金貨10枚をあたえる。	

	<ul style="list-style-type: none"> • 黒板の表にある各班の金貨の数値は何をあらわしていると思うか。 • 表の金貨の合計は何を表しているのか。 • 国力を貨幣で表すことで、国家や政府にどのようなメリットがあるのか。 • ポンド金貨の使用には、どのような目的があるのか。 • イギリスの人々は自分の生活のために働き賃金を得ていると思っているが、働くことは何をもちがらしているのか。 • 国力を示すために貨幣を用いることによって、イギリスの人々の労働はどのような意図を受けるようになったと思うか。 		<p>③ 2分間で1年と考え、1年ごとに綿織物工場は食糧8、農家は服4、貿易商は食糧8、服4を金貨で購入する必要がある。原料がなかった場合は適宜金貨で貿易商から購入する。</p> <p>④ 適宜、班ごとに技術革新、農業革命、交通革命がおり、生産が加速する。</p> <p>⑤ 最終的には、各班の獲得したお金が労働生産量を示すこと、クラス全体で獲得した貨幣が国富となること、毎年、国富が増加していく中で労働生産量に従って獲得した貨幣量に差が起り、貧富の差が発生したことなどに気がつかせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 貨幣の数値が自由に競争し生産したイギリスの人々の労働生産量を示している。 • イギリスの国力（国富）。 • 国力を貨幣で表すことで、政府や国家が使用できるようになる。 • ポンド金貨に人々の自由競争に基づく労働生産を結びつける目的。ポンド金貨で国力（国富）を表し、政府や国家が使用可能にする目的。 • イギリスの国力の増加。 • 国力を増大させたいイギリス政府（国家）の意図。 	
	<p>*ここまでは、適宜、トゥールミン図式を利用して、生徒に考えさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> ポンド金貨の使用 → (各班の労働の結果、貧富の差、全体の貨幣量の増加) </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 目的①ポンド金貨が人々の自由競争に基づく労働生産量を示す。 目的②ポンド金貨がイギリス政府が使用できる国富を示す。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 価値観①国力を増大させたいイギリス政府（国家）の意図。 </div>			
	<ul style="list-style-type: none"> • 19世紀のイギリスでは、貨幣にどのような働きが結びつき、労働をどのように変化させたのか。 		<ul style="list-style-type: none"> • 金本位制度の下のポンド金貨の使用は目的①自由な競争に基づく労働生産量を貨幣で示し、また、目的②貨幣が国家の使用できる国富を表すようにした。その目的には価値観（1）国力を増大させたい政府（国家）の意図が結びついた。そのため、より多くの金貨を得るために、劣悪な環境の中でも労働に従事し、金貨の多寡によって貧富の差が発生する問題に直面した。 	
小 単 元 3 三 時	<ul style="list-style-type: none"> • 世界恐慌に直面したアメリカ合衆国が発行した貨幣は何か。 • ドル紙幣の使用で、アメリカの人々はどのような労働に従事することになったのか。 	シミレーション3	<ul style="list-style-type: none"> • ドル紙幣。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> シミレーション3 ①「シミレーション2」の結果を利用して、綿工場を自動車工場、農家、貿易商（石油・肥料）のように設定を変える。前回の貧富の差の結果から、自動車工場、農家の班のそれぞれ1つが世界恐慌で失業しているとする。 </div>	

限

か、体験してみよう。

- ②教師は連邦準備委員会となり、金本位制から管理通貨制度を採用することを宣言し、ドル紙幣を500枚準備する。ドル紙幣1枚を自動車1台と、また、食糧2キロで交換することにする。石油・肥料は1つドル紙幣1枚で交換する。班にドル紙幣10枚をあたえる。
- ③2分間で1年と考え、1年ごとに自動車工場は食糧8、農家は自動車4、貿易商は食糧8、自動車4をドル紙幣で購入する必要がある。原料がなくなった場合は適宜、ドル紙幣で貿易商から購入する。また、技術革新が進み自動車工場、農家とも生産のスピードが倍以上（二人にはさみ）となっている。
- ④失業者に対して政府からダム建設を3年契約で受注し、毎年ドル紙幣20枚を連邦準備委員会から払うことにする。
- ⑤イベントとして、失業者から公務員1班を作り、毎年ドル紙幣10枚を連邦準備委員会から払うことにする。
- ⑥イベントとして自動車・農家の生産を1年で8ドル紙幣分に限定する。
- ⑦イベントとして失業者に対するダム建設を3年延長し、毎年ドル紙幣40枚を連邦準備委員会から払うことにする。
- ⑧最終的には、貧富の差を解消するために、労働が公的な労働と私的（民間）の労働に区別され、貨幣に価値化されること、私的な労働よりも公的な労働が重視される問題に直面すること、また、金と結びつかないことで、紙幣が大量に流通し国富を増大させることなどに、気がつかせる。

- ・黒板の表にある各班のドル紙幣の数値は何をあらわしていると思うか。
- ・ドル紙幣の使用は、どのような目的があるのか。
- ・アメリカ政府はなぜ目的③④を結びつけドル紙幣を流通させたのか。

- ・貨幣の数値が管理的調整的に生産したアメリカの人々の労働生産量を示している。貧富の差が縮小している。全体の貨幣量は増加している。
- ・目的③ドル紙幣が管理調整に基づく労働生産量を示す。目的④ドル紙幣がアメリカ政府が使用できる国富を示す。
- ・世界恐慌に直面したアメリカ政府は生産（労働）を調整しながらも、国力の維持を目指す意図があった。

*ここまでは、適宜、トゥールミン図式を利用して、生徒に考えさせる。



目的③ドル紙幣が管理調整に基づく労働生産量を示す。
 目的④ドル紙幣がアメリカ政府が使用できる国富を示す。

価値観（2）国力を維持したいアメリカ政府（国家）の意図。

- ・20世紀のアメリカでは、貨幣にどのような働きが結びつき、労働をどのように変化させたのか。

- ・アメリカでは管理通貨制度の下でドル紙幣を使用することで、目的③ドル紙幣で管理・調整された労働生産量を示し、また、政府が使用できる国富を示した。この目的④国富として貨幣に象徴された。その背景には価値観（2）国富を維持しようとする国家の意図があった。そのため、国家の提供するより安定した労働に従事することを人々が求める問題に直面した。

○これまでの学習から、私達の貨幣の使用にはどのような働きが結びついている

貨幣の使用	目的 労働の価値化	
	①自由競争に基づく	③管理・調整に基づく

	のか。ツールミン図式を利用して、表を完成させよう。		目的 富の象 徴	②④国 家が使 用する	価値観（1） 国力を増大さ せたい	価値観（2） 国力を維持し たい																	
意見アンケート・自己評価シートの実施																							
小 単 元 4 四 時 限	<p>◎私たちは貨幣をどのように使用することが出来るのか。</p> <p>・私達は貨幣の使い方を覚えて、歴史的価値観が結びつかない働きを結びつけられるのか。地域通貨のシミュレーションを体験しよう。</p> <p>・地域通貨には、どのような目的や価値観を結びつけることができるだろうか。</p> <p>・価値観（3）はこれまでの価値観と異なるものである。表をまとめてみよう。</p> <p>◎あなたは地域通貨を導入することで、貨幣に新しい意味を持たすことができると思うか。</p>	2 地域通貨の事例 シミュレーション4	<p>シミュレーション4</p> <p>①各個人で役割分担カードで担当した人物になって、やりたいこととやって欲しいことを書き出す。</p> <p>②各班でやりたいこととやって欲しいことをまとめ、各班の代表が案を持ち寄り、事務局を立ち上げる。</p> <p>④クラス全体で準備できるサービスと、求められるサービスから、どのような価値がある貨幣を造れるか、四人班で相談する。（教師が用意・協力する）</p> <p>⑤クラスで流通する地域通貨を準備する。</p> <p>⑥運用する。</p> <p>⑦運用の感想を話し合う。地域通貨を流通することで、クラスメートとの会話・相談が始まったこと、労働を行うことで感謝されたこと、などシミュレーション2・3では経験しなかったコミュニケーションを経験したことに気がつかせる。</p> <p>・ツールミン図式の完成</p> <p>地域通貨の使用 → 会話、助け合い</p> <p>目的⑤自分に応じた労働生産量を価値化する働きを持つようになった。</p> <p>目的⑥自分が使用できる富の総量を示す。</p> <p>価値観（3）自分や他人の必要なことのために働くべきである。</p> <p>・貨幣の使用の表の完成</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="2" style="text-align: left;">貨幣の使用</th> <th colspan="2" style="text-align: left;">目的 労働の価値化</th> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>①自由競争に基づく</td> <td>③⑤管理・調整に基づく</td> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="width: 15%;">目的 富の象 徴</td> <td style="width: 15%;">②④国 家が使 用する</td> <td style="width: 15%;">価値観（1） 国力を増大さ せたい</td> <td style="width: 15%;">価値観（2） 国力を維持し たい</td> </tr> <tr> <td></td> <td>⑥自分 が使用 する</td> <td>*</td> <td>価値観（3） 自分や他人が の必要なこと のために働きた い。</td> </tr> </tbody> </table> <p>◎（例）地域通貨を導入することで、自分がしたいあるいはしてほしいことを富（使用価値に基づく富）に象徴させることができる。また、導入することによって、人々の間でコミュニケーションが始まる可能性が高い。この結果、私達の労働は地域で調整された労働を価値化し、また、国家ではない個人の使用価値を富として象徴する地域通貨を使用することで、自分のためあるいは人のための労働を取り入れることができるかもしれない。</p>				貨幣の使用		目的 労働の価値化				①自由競争に基づく	③⑤管理・調整に基づく	目的 富の象 徴	②④国 家が使 用する	価値観（1） 国力を増大さ せたい	価値観（2） 国力を維持し たい		⑥自分 が使用 する	*	価値観（3） 自分や他人が の必要なこと のために働きた い。	◎事後アンケート・自己評価アンケートで答える。
			貨幣の使用		目的 労働の価値化																		
		①自由競争に基づく	③⑤管理・調整に基づく																				
目的 富の象 徴	②④国 家が使 用する	価値観（1） 国力を増大さ せたい	価値観（2） 国力を維持し たい																				
	⑥自分 が使用 する	*	価値観（3） 自分や他人が の必要なこと のために働きた い。																				
事後アンケート・自己評価シートを実施																							

資料

- 1 中央大学政策科学研究室監修『あなたの値段はいくら？』アミューズメントボックス 2000
- 2 ぶぎん地域経済研究所『やってみよう！地域通貨』学陽書房 2003

3. 成果と課題

本研究ではパフォーマンス課題を「言説『貨幣』について考える」に設定した。そして、ルーブリックは貨幣を制度としての歴史的事実・知識ではなく、言説として構築し、さらに、パーソナルに語るという市民的資質を段階的・向上的に評価するものとした。ルーブリックは学習内容をアンカーとして、また、言説と歴史の脱構築論に基づいて組織した。評価問題は貨幣についての生徒の言説を収集し評価するだけでなく、自己評価できるようにした。単元計画は、教師と生徒が協力して市民的資質を育成する道筋とした。そして、生徒がどの段階まで達成できたかを評価するだけでなく、生徒が自分の達成度を理解でき学びを相対化するものになった。

この結果、本研究は市民的資質を把握する評価方法として、次のような成果を示すことができた。第1に、主体的な市民的資質を把握するために、パフォーマンス評価が有効であること、第2に、パフォーマンス評価は段階的に生徒を向上させる学習論に基づいていること、第3に、パフォーマンス評価は生徒に開示され、自己評価できる評価になること、第4に、パフォーマンス評価は教師と生徒が協力し、目標を達成するためのものであること、である。

本研究の意義は、パフォーマンス課題とその評価を導入すると、生徒の一人ひとりの達成水準が見えるようになり、生徒の学習が教師にも生徒自身にも理解でき、自分が授業で何を学んだのかが分かるようになることを示したことにある。そうすることで、生徒一人一人が、貨幣に関してどのように語ることができるかを、歴史の語りを通して言説と価値観の関係で自分自身で説明できるなどの市民的資質を主体的に学べることを明らかにしたことである。

しかし、本研究は次のような課題が残っている。第1に、パフォーマンス評価の実施計画を示した段階に留まっていることである。今後は本単元の授業実践と評価活動を実際に行い、市民的資質の達成をどのように評価付けしたのかを示す必要があるだろう。特に、自己評価シートによる生徒の主体性の変化や効果を分析したい。第2に、地理歴史科カリキュラムの一単元の評価研究に留まっていることである。「長期的ルーブリック」などマクロな評価方法を検討したい。第3に、「真正の評価」論で示されている、評価と保護者との関係については言及できていないことである。評価における保護者の積極的な役割についても研究していきたい。

註

- 1) 宮本英征他「ポスト国民国家へと移行する社会を読み解く次世代カリキュラムの開発研究(I):言説を構成原理とする高校地理歴史科世界史の場合」広島大学学部・附属学校共同研究機構『学部・附属学校共同研究紀要』(42)、2014年、pp. 49 - 56、宮本英征他「ポスト国民国家へと移行する社会を読み解く次世代カリキュラムの開発研究(II)-生活世界の言説に着目した高校地理歴史科カリキュラムの変革-」広島大学学部・附属学校共同研究機構『学部・附属学校共同研究紀要』(43)、2015年、pp. 123 - 132。
- 2) 例えば、科目世界史に関する代表的な先行研究には、棚橋健治「近現代史学習の授業開発研究(5)-小単元『エスニック問題に揺れるドイツ』の学習評価問題-」広島大学学部・附属学校共同研究機構『学部・附属学校共同研究紀要』第29号、2000年、藤岡弘輝「歴史的思考力を育成する世界史教育の構築-米国AP World Historyの分析を手がかりとして-」全国社会科教育学会『社会科研究』第72号、2010年、好村孝則「認知構造の外部表現化による世界史学習評価の研究-ISM構造学習法の導入-」全国社会科教育学会『社会科研究』41号、1993年、がある。
- 3) 西岡加奈恵「序章 教育評価とは何か」西岡加奈恵・石井英真・田中耕治『新しい教育評価入門』有斐閣、2015年、p. 10。
- 4) 前掲3) p. 10。
- 5) 柴田康弘の研究(「市民社会科における対話的交渉過程の評価方法開発とその実践的検証-中学校公民的分野単元Ⅱ成人年齢を考える」を事例として-)社会系教科教育学会『社会系教科教育研究』第21号、pp. 81 - 90。)、豊嶋啓司の研究(「社会科の市民的資質評価:パフォーマンス評価論に依拠した中学校社会科のペーパーテスト開発」福岡教育大学編『福岡教育大学紀要、第2分冊、社会科編』第64号、2015年、pp. 67 - 80。)、藤本将人の研究(「市民性教育におけるオーセンティック概念の特質-ミシガン州社会科評価プロジェクトの場合-」全国社会科教育学会『社会科研究』第61号、2004年、pp. 21 - 30。)がある。
- 6) 西岡加奈恵編『逆引き設計で確かな学力を保障する』明治図書、2008年。
- 7) 前掲6) p. 14。
- 8) 貨幣を言説として扱うために、佐藤慶幸『生活世界と対話の理論』文真堂、1991年、などを参考にした。学習内容の開発では、主に内山節『貨幣の思想史』新潮社、1997年、を参考にした。